

家持の「鬱結」と中国文学（下）

曹そう

元げん

春しゅん

二 家持の「鬱結」

『家持の「鬱結」と中国文学（上）』における考察では、「鬱結」という言葉は屈原が使い始めたもので、その使用が屈原作品に三例あったことを明らかにした。偶然ではあるが、万葉歌人の大伴家持にも「鬱結」の語を用いた作品が三例あり、それらは歌の題詞と詩序に見られた。屈原の用いた「鬱結」は、自身の不幸な遭遇を言うものである。では家持の場合、この言葉で何を表したのであるうか。本稿では家持の用いた「鬱結」という語の出典、及びその用法について、具体的に考察していくことにする。

（一） 弟書持の贈歌に報える歌の題詞における「鬱結」

天平十二年（七四一）の四月二日、久邇京に居る家持に弟の書持が奈良の家から二首の歌を贈った。

霍ほ公と鳥とをよ詠よみよしよ歌よ二よ首よ

橘とこはなは常とこ花はなにもがほととぎす住むと来き鳴なかば聞きかぬ日ひなけむ

（17・三九〇九）

家持の「鬱結」と中国文学（下）

玉に貫く棟を家に植ゑたらば山ほととぎす離れず来むかも

(17・三九一〇)

初夏を代表する植物の「橘」、「棟」と鳥の「ホトトギス」を詠んだ弟書持の歌に応じ、家持はその翌日、題詞のついた三首の歌を弟書持に返した。その歌は次の通りである。

あしひきの山辺にをればほととぎす木の間立ち潜き鳴かぬ日はなし

(17・三九一一)

ほととぎす何の心そ橘の玉貫く月し来鳴きとよむる

(17・三九一二)

ほととぎす棟の枝に行きてゐば花は散らむな玉と見るまで

(17・三九一三)

書持と家持の贈答歌は、みな花鳥を題材とする詠物歌である。書持の二首は、その重点をホトトギスに置いている。第一首は、橘はいつでも咲いている花であればよいのに。ホトトギスが住み着くつもりでやって来、そして鳴いてくれたら、その声を聞かない日はなからうに、と。第二首は、玉に通す棟を家の庭に植えておけば、山ホトトギスは毎日来てくれるだろうか、という意味である。

書持の第二首の歌の「棟」はセンダンの古名で、初夏に淡紫色の五弁花が円錐状に咲く。万葉集中に棟を詠む歌は四首あり、書持と家持のこの贈答歌の他に、七九八、一九七三の歌に詠まれている。新日本古典文学大系『萬葉集』(四)の解釈によれば、この花には「逢ふ」の意が籠められており、山ホトトギスに兄家持をなぞらえた書持の、兄に逢いたいという気持ちが表示されているという。

書持のこの贈歌について、小野寛氏は「久邇京の歌」で次のように論じている。

天平十一年六月、家持が妾を亡くした時、その「亡妾悲傷歌」に書持は兄の心になって、和している。この度の兄家持に贈る「ほととぎす詠」も、ただの「ほととぎす詠」ではありえない。書持の二首に歌われた心は一つ、ほととぎすがわが家に住みついて、絶え間なくその鳴き声を聞かせてほしいという願いである。書持の歌はほととぎすに兄をなぞらえたというような露骨なものではなく、兄への思いをこめて「ほととぎす」を歌っているのである。

兄思いの書持の歌に答える家持の歌の一首目は、久邇の新京の所在地を「山辺」という象徴的な意味を持つ言葉で表現し、山ホトトギスの生感を「木の間立ち潜き鳴かぬ日はなし」と細やかに描く。二首目では、ホトトギスを人の心を有するものとし、友人のように話しかけている。橘の花が咲いた折にホトトギスが飛来し、鳴き声を響かせていることに、喜びの気持ちが描写される。橋本達雄氏は家持の歌について、「大伴家持と二十四節氣」で、「節氣を念頭において読むとよく理解できると思われるものに往々ゆき当たる。」と評している。この二首目の歌は、まさにその指摘に当たると思われる。

三首目は、弟書持の二首目の歌に応じて詠んだものであり、初夏の風物を悦び愛でる心情が表されている。ホトトギスが棟の枝に飛んで行き、そして止まったならば、きつと玉のような花が散り落ちるであろう、という意である。鳥と花をダイナミックに描く表現手法は、南朝齊の謝朓の「魚の戯れて新しき荷は動き／鳥の散じて餘りの花は落ちる」（「游東田」）のそれと似通っている。両者の異なるところは、謝朓は実景を描いたのに対して、家持は想像上の風景を描いた点である。

ところで、散ってしまった紫色の花弁を美しい玉に見立てるという着想はどこから来たのであろうか。『藝文類聚』卷九十三に収められる梁の簡文帝の「西齋行馬」の詩に、

晨風白金絡　晨風　白金の絡
桃花紫玉珂　桃花　紫玉の珂

とある。晨風と桃花は共に馬の名前である。この二句は、晨風は白金の手綱を、桃花は紫色の玉石の轡をつけているという意である。家持は「桃花紫玉珂」の詩句が持つ視覚的な美しさにヒントを得て、第三首の歌を構想したのかもしれない。

次に「鬱結」が用いられた「三九一一」～「三九一三」題詞を見てみよう。

橙橘初咲、霍鳥翻嚶。对此時候、詎不暢志。因作三首短歌、以散鬱結之緒耳

橙橘初めて咲き、霍鳥翻り嚶く。この時候に對ひて、詎志を暢べざらめや。因りて三首の短歌を作り、以て鬱結の緒を散らさまくのみ。

この題詞は、四字句と六字句を主体とする形式で綴られ、第一句と第二句は視覚と聴覚の対句となっている。中国の詩賦に模した形式で題詞を書くことは、家持によって初めてなされた試みであった。漢籍から学び取ったものを自らの作品に取り込もうとする、万葉歌人の情熱が感じられる。

次に、題詞と漢詩文との具体的な関連を考察していくことにする。

1 橙橘初咲、霍鳥翻嚶

題詞の冒頭の「橙橘」は、橘の木を指すとされる。しかし漢籍における「橙」と「橘」とは、それぞれ別の木である。例えば『藝文類聚』卷八十七・果部下「荔支」の項に収められる『東觀漢記』に、「單于來朝、賜橙、橘、龍眼、荔支。(單于來朝し、橙、橘、龍眼、荔支を賜る)」とあり、ここでは橙と橘は区別されている。

「橙橘初咲」の「初咲」は、花が初めて咲く、花が咲いたばかりという意味である。万葉集中にある「初咲」の二例はともに家持によるものだが、もう一例は、次に示す四二三八歌の左注に見られる。

右、判官久米久米朝臣広繩以正税帳_二応入_三京師、仍守大伴宿祢家持作_二此歌_一也。但越中風土、梅花柳絮三月初咲耳。

「初咲」は漢籍にその用例を見出せないものの、類似語の「初發」「始發」「初開」の例は少なくない。例えば、『南史・顏延之傳』に、

延之嘗問鮑照、己與靈運優劣、照曰、謝五言如初發芙蓉、自然可愛。君詩如鋪錦

列繡、亦雕繡。

延之 嘗て鮑照に問ふ、己と靈運は優劣す。照曰く「謝の五言は初めて發く芙蓉の如く、自然たり、愛す可し。君の詩は錦を鋪き繡を列びて亦た繡を雕める如し。

とある。鮑照が述べた「初發芙蓉」は、謝靈運の五言詩を指す。初めて咲く芙蓉のように清らかで愛らしいという、その詩への高い評価を言ったものである。

「始發」の用例は謝靈運の「游南亭」詩に見られる。

澤蘭漸被徑 澤蘭は漸く徑に被り

芙蓉始發池 芙蓉は始めて池に發く

〔文選〕卷二十二

その他、南朝梁の庾肩吾の「同蕭左丞咏摘梅花」詩にも、「始發」の用例が見られる。

臆梅朝始發 臆梅は朝始めて發く

庭雪晚初消 庭雪は晩初めて消ゆ

〔初學記〕卷二十八

「初開」は唐代以前の用例が極めて少なく、『藝文類聚』卷八十八・木部上「木」の項に収められる南朝梁の劉孝威の「詠剪彩花詩二首」其一に一例が見られる。

葉舒非漸大 葉舒 漸く大なるに非ず

花發是初開 花發 是れ初めて開く

家持の「鬱結」と中国文学（下）

無論人訝似 無論 人は似るを訝り

蜂見也争來 蜂見ては また争ひ來たり

詩題にいう「彩花」は綵花のことで、色とりどりの絹で作られた造花をいう。ここでは出来上がったばかりの花を「初開」と表現している。盛唐以後、初めて咲く蘭、蓮、牡丹、菊、槿、芍薬、梅などを「初開」で表現するようになった。

漢詩文における「初發」「始發」「初開」を踏まえ、家持がこの「初咲」という歌語を作り出した可能性が高い。また「橙橘初咲」との対句である「霍鳥翻嚶」の表現にも、家持の工夫が見られる。

「霍鳥」について、新日本古典文学大系の『萬葉集』（四）の注釈は次の通りである。

次の霍鳥（西本願寺本）も「霍公鳥」を略して二文字で表したと見たい。花と鳥で四文字の対になることを意識しているのである。「翻嚶」は漢籍に用例未見。「嚶ナク」（名義抄）。ただし、「嚶」は本来は鳥の鳴き声の擬声語。「鳥鳴くこと嚶嚶」（詩経・小雅・伐木）。

「翻嚶」は万葉集中に家持による一例しか見られない。諸本はそれを「飛びながら鳴く」、「空をひらひら飛びながら鳴く」のように解釈しているが、漢詩文においては、鳥が空をひらひら飛ぶことは「翻飛」、飛びながら鳴くことは「飛鳴」と表現する。

① 有鳥翻飛 鳥有りて翻飛す

不遑休息 休息するに遑まなし

西晉・劉琨「答盧諶詩」（『文選』卷二十五）

② 越壑凌岑 壑を越え岑を凌ぎ

飛鳴薄廩 飛び鳴きて廩に薄る

西晉・潘安仁「射雉賦」（『文選』卷九）

鳥が空をひらひら飛びながら鳴くという用例は、魏文帝曹丕の「銅雀園詩」に見られる。

飛鳥翻翔舞 飛鳥翻翔して舞ひ

悲鳴集北林 悲鳴し北林に集ふ

〔藝文類聚〕卷二十八

「翻翔」は、唐代以前では曹丕のこの一例しか見出せない。家持の「見翻翔鳴作歌」（四一四一歌の題詞）の「翻翔」は、曹丕の詩句から取り入れられたものと指摘されている。家持の「翻翔」の「翻」が、上記の「翻翔」「翻翔」のような詩語に影響を受けたことは間違いないであろう。しかし「嚶」の字で、ホトトギスの鳴き声を描く用例は漢籍に見られない。

『日本うたことは表現辞典』⁴によれば、霍公鳥の鳴声は極めて特徴的であり、「テツペンカケタカ・ホツチヨンカケタカ」や「キヨツキヨ・キヨキヨキヨキヨ」などと聞こえ、昼夜わけへだてなく鳴くという。

また、『ちんちん千鳥のなく声』⁵では、「ホトトギスは、ウグイスのような透きとおる美声ではなく、鋭く響き渡る声で、オツキヨ、キヨキヨキヨキヨと鳴く。何か思いつめたような、胸に訴えかける一種独特の激しい声である」とされている。

万葉集中にホトトギスを詠んだ歌は全部で一五五首あり、そのうち六十三首が家持の歌である。家持のホトトギスの鳴き声を詠んだ歌について調査したところ、以下のような点が明らかになった。

家持はホトトギスの鳴き声を、「喧」「鳴」「嚶」「啣」等の字で表現する。そのうち、「喧」と「鳴」を用いた例が多く、「嚶」と「啣」はわずかに例ずつしかない。ところで家持はなぜこの時期に、弟書持の歌に答える歌の題詞にだけ、使用例の多い「喧」と「鳴」ではなく、あえて「嚶」の字を用いて鳴き声を表したのであるか。

「霍鳥翻翔」の「嚶」の典故については、諸本で『詩経』小雅・「伐木」の第二句の「鳥鳴くこと嚶嚶たり」によると指摘される。しかし筆者はむしろ、第五句、六句との関連に注目する。以下にその詩を見てみよう。

伐木丁丁 木を伐ること丁丁たり

家持の「鬱結」と中国文学（下）

鳥鳴嚶嚶 鳥鳴くこと嚶嚶たり

出自幽谷 幽谷より出でて

遷于喬木 喬木に遷る

嚶其鳴矣 嚶として其れ鳴くは

求其友聲 其の友を求むるの聲

相彼鳥矣 相れ彼の鳥の

猶求友聲 猶ほ友を求むるの聲

矧伊人矣 矧んや伊れ人の

不求友生 友生を求めざらんや

神之聽之 神之之を聽き

終和且平 終に和して且つ平らかなり

木を伐る音がこんこんと響き、鳥の鳴く声がおうおうと聞こえる。鳥は深き谷間より高き木に移る。おうと鳴くその声は友を呼ぶ為のもの。彼の鳥ですら友を求め鳴く。ましてや人が神を求めないはずはない。神がこれをお聞きになって、我らに和平を下された、というのが詩の意味である。

三章から成るこの詩は、『詩経』の六義のひとつで、植物・動物などによせて述べる「興」という表現法で詠まれている。上に引用した第一章は、幽谷の「伐木丁丁」によって始まる。続けて鳥の鳴き交わす声を「求友」の喩えとして描く。それから鳥でさえ友を求めて鳴いているのに、ましてや人間はいうまでもないという自然の理を導き、最後に神の加護を願う心情を表わす。

『詩経』小雅・「伐木」をはじめ、「嚶」「鳴」「嚶嚶」「鳴嚶」「嚶嚶」という語は、仲間や友を求め合う心情を表わす詩語として受け継がれてきた。例えば、西晉の潘岳は「寡婦賦」で、

孤鳥嘷兮悲鳴

孤鳥嘷として悲しみ鳴き

長松萋兮振柯

長松萋として柯を振るふ

〔文選〕卷十六

と詠んでいる。「孤鳥嘷兮悲鳴」の「孤鳥」は、夫に先立たれた未亡人の象徴であるが、「嘷兮悲鳴」には、彼女の悲しい気持ちだけでなく、友達を求める寂しい気持ちも込められている。

南朝宋の謝氏從兄弟の贈答詩に用いられた「嘷鳴」「鳴嘷」は、友達を求め合う気持ちをよく表している。謝氏は由緒ある大家族で、文才に恵まれた人材を多く輩出した。謝宣遠、謝靈運、及び謝惠連の詩はみな『文選』に収められている。まずは謝宣遠の「於安城答靈運」詩を見てみたい。

華萼相光飾

華萼は相光飾し

嘷鳴悅同響

嘷鳴は同響を悦ぶ

親親子敦予

親を親しみて子は子に敦くし

賢賢吾爾賞

賢を賢として吾は爾を賞す

比景後鮮輝

景を比ぶれば鮮輝に後れ

方年一日長

年を方ぶれば一日長ず

萋萋愛榮條

萋萋は榮條を愛し

涸流好河廣

涸流は河廣を好す

〔文選〕卷二十五

この詩の意味は、花と萼とが相い照らすように兄弟が互いに高め合い、鳥たちが互いに囀り、その声が同じであることを悦ぶように、私たち兄弟は仲良くした。親戚を親戚として、君は私に手厚くし、賢才を賢才として、私は君を心から尊敬する。才能を比べれば私は君の輝かしさには到底及ばないが、年齢は私の方が少しばかり上である。萎れた葉が榮える枝をいとしみ、涸れた流れが大川の広さを

讀えるように、私は君を敬愛して止まない、と。

詩題にいう「靈運」は謝靈運のことで、この詩を吟じた謝宣遠とは従兄弟にあたる。東晋の義熙十一年（四一五）の夏、安城太守となった謝宣遠に、謝靈運から「贈安城詩」が贈られた。上に引用した謝宣遠の「於安城答靈運」詩は、謝靈運の詩に答えたものである。本詩の第一句・二句は花が咲き、鳥が互いを求め合うように囀るといった美しい光景を描く。その中で「華萼」と「嚶鳴」が、象徴的な意味を持つ詩語として用いられている。

「華萼」は兄弟の喩えで、「嚶鳴」は友を求め合う喩えである。詩人はこの「嚶鳴」の語を用い、従弟である謝靈運に自分の気持ちを伝えようとしたのである。同じ表現手法が謝靈運の「酬従弟惠連」詩にも見られる。詩題の「惠連」とは謝惠連のことで、この人物も謝靈運の従兄弟である。謝靈運は「酬従弟惠連」五章の第一章で、惠連を自らの「賞心の友」と呼んでいる。森野繁夫先生の『謝靈運論集』⁶によれば、謝靈運は謝惠連より二十二歳年上であるが、若い謝惠連の才能を高く評価し、自身の「四友」⁷の一人に数えていたという。

謝惠連は元嘉七年（四三〇）の春、司徒の彭城王義康の法曹參軍に任命された。船に乗って都の建康に向かう途中、謝靈運に「西陵遇風獻康樂」五章を贈る。謝靈運も五章から成る「酬従弟惠連」詩を吟じてそれに答えた。この詩の第五章に「嚶鳴」が用いられている。

第五章

暮春雖未交 暮春に未だ交はらずと雖ども

仲春善遊遨 仲春に善く遊遨せん

山桃發紅萼 山桃は紅萼を發き

野蕨漸紫苞 野蕨は紫苞を漸すすむ

嚶嚶已悅豫 嚶嚶して已に悅豫するも

幽居猶鬱陶 幽居して猶ほ鬱陶たり

夢寐佇歸舟 夢寐に歸舟を佇つ^ま

釋我吝與勞 我が吝と勞を釋かん

〔「文選」卷二十五〕

暮春にはまだ聊か間があるが、仲春の時期を楽しく遊ぶことにしよう。山の桃はもう紅の夢を開き、野の蕨は紫の苞を延ばしている。鳴き交わす鳥の声はすでに楽しそうだが、独り寂しく暮す私の心は結ばれて晴れ晴れとしない。私は夢の中であなたが帰ってくる舟をひたすら待っている。あなたならきつと、私のしみつたれた心と気苦労を解きほぐしてくれるだろうから。

本詩の第一句の「暮春には未だに交はらずと雖ども」は、「酬從弟惠連」詩の第四章の結句の「儻若歸言を果たさば、共に暮春の時を陶しまん」の続きである。この詩句により、謝惠連と共に暮春の好時節を楽しむことが待ち遠しいという謝靈運の心境が窺われる。友を求めて悦び囀る鳥は、謝靈運自身のことであろう。第五句の「鳴嚶」の用例は、謝宣遠の「嚶鳴」のそれと同じである。

以上に挙げた「嚶」「嚶鳴」「鳴嚶」の用例は、いずれも『詩経』小雅・「伐木」の文学的伝統を受け継いだものである。特に謝氏の従兄弟への贈答詩で用いられた「嚶鳴」「鳴嚶」には、「賞心の友」^⑨を求め合う気持ち^⑩が託されていると言える。

謝靈運の「酬從弟惠連」詩の第五章と家持の題詞とを比較すれば、以下のような類似点を挙げることができる。

A 謝靈運の「酬從弟惠連」詩

B 家持の「題詞」

① 山桃發紅萼

橙橘初咲

野蕨漸紫苞

② 鳴嚶已悅豫

霍鳥翻嚶

③ 鬱陶

鬱結

両者とも花が咲き、鳥が囀る時節の風物を描く。通常良い時節を迎えれば嬉しい気持ちになるものだが、謝靈運と家持は共に「鬱陶」、「鬱結」といった語で、それぞれが晴れ晴れしくない心持を表現した。謝靈運の場合、「鬱陶」は「賞心の友」が傍にいないからであっ

た。では家持の場合は、その「鬱結」とは何に因ったのであろうか。

2 対此時候、詎不暢志

漢籍に「对此」、「時候」の各語の用例はあるが、「対此時候」と四字での用例は見られない。家持の「時候」は季節、時節を指す。これと同じ意味の用例は唐代以前に少なく、南朝梁の劉孝威の「烏生八九子」詩に一例が見られる。

靈台已鑄像 靈台已に鑄像し

流蘇時候風 流蘇 時候の風

〔藝文類聚〕卷九十二

「对此」の用例は非常に多い。家持が使う「对此」とよく似た例は、『玉台新詠』卷八所収の、南朝梁の徐君蒨による「雜詩二首」其の一「初春攜内人行戲」詩に見られる。

初春攜内人行戲（初春内人を攜へて行々戯る）

梳飾多今世 梳飾は多く今世

衣著一時新 衣著は一に時新

草短猶通屨 草短く猶ほ屨を通ず

梅香漸著人 梅香しく漸く人に著く

樹斜牽錦帔 樹斜に錦帔を牽き

風横入紅綸 風横さまに紅綸に入る

滿酌蘭英酒 滿酌す蘭英の酒

對此得娛神 此に對して神を娛しますことを得

詩を吟じた徐君蒨は南朝梁の人、字は懷簡である。浪漫的で且つハイカラな人柄のこの詩人は、湘東王蕭繹の諮議參軍を務めた。六朝時代の詩の特徴を存分に持つ本詩の第一句・二句では、同伴の妻のモダンな髪形、装飾品など、その最新の装いが細やかに描写される。第三句・四句は、早春の小さい草や梅の香りを、第五・六句では樹木と風を借りて、高価で美しい服飾を身に着けた美人の姿、その身のこなしを生き生きと描く。そして結句では、蘭の花を浮かべた美酒を酌み、早春の美景と美人を眺め、愉快になる詩人の気持ちが述べられる。

第八句の「對此得娛神」の用語と表現は、家持の「對此時候、詎不暢志」を連想させる。徐君蒨の「娛神」とは心を楽しませるという意味であり、家持の「暢志」の意味と似通っている。

「暢志」について、『漢語大詞典』では次のように解釈されている。

(1) 順遂心志。唐 寒山《詩》之二七四：「我更何所亲，暢志自宜老。」

(2) 指使心志舒暢。《史記·乐書》唐 司马贞索隱述贊：「乐之所兴，在乎防欲。陶心暢志，舞手蹈足。」

『漢語大詞典』の解釈によれば、「暢志」の(1)は、思いのままに心をやるという意味である。唐代の寒山の「詩」の二七四に、「我更何所亲，暢志自宜老（我れ更に何の親しむ所ぞ、志を暢べて自から宜しく老ゆべし）」とある。「暢志」の(2)は、心を伸びやかにすることを言う。『史記·乐書』唐·司马贞の「索隱述贊」によれば、「音楽の発端は、ほしいと思う心を遮り止めるところにある。心を喜ばせ、また伸びやかにさせ、有頂天になるよう導くのが音楽である」という。

家持の「暢志」は、『漢語大詞典』の「暢志」の(2)と同じ意味であると思われる。漢籍には「暢志」の用例が極めて少なく、『漢語大詞典』の用例の他に、魏晉の王蘊之の「蘭亭詩」に一例が見られる。

散豁情志暢 散豁として情志を暢ばし

塵纓忽已捐 塵纓忽ち已に捐す

〔詩紀〕卷三十三

家持の「暢志」は、漢詩の「情志暢」、「娛神」の用語を元に作り出されたのではなからうか。

次に「詎不暢志」の「詎不」の用例を見てみよう。北朝周の庾信の「烏夜啼曲」詩に一例が見られる。

詎不自驚長淚落 詎ぞ自ら長涙の落つるを驚かざる

到頭啼烏恒夜啼 到頭 啼烏 恒夜啼く

北朝周・庾信「烏夜啼曲」詩（『藝文類聚』卷四十二）

この詩の他に、『藝文類聚』卷四十・礼部下「吊」の項所収の『淮南子』卷十八・「人間訓」に、「此何詎不乃爲禍、家富良馬、其子騎馬、墜而折髀、人皆吊之。（此れ何詎禍と爲らざらんや、と。家、良馬に富む。其の子、馬に騎りて、墜ちて髀を折る。人は皆之を吊ふ。）」とある。

3 因作三首短歌、以散鬱結之緒耳

「鬱結之緒」は漢籍に用例を見出せないが、「…之緒」の例は東漢の班孟堅の「史述贊三首」述高紀第一に見られる。

皇矣漢祖 皇たる漢の祖

纂堯之緒 堯の緒を纂ぐ

（『文選』卷五十）

「散鬱結」の例も見当たらないが、マイナス的な感情を晴らすという意味を持つ「散愁」「散緒」は一例ずつある。

① 逍遙臨四注 逍遙し 四注に臨みて

兼持散九愁 九愁を散らすを兼持す

南朝梁・蕭綱「喜疾瘳詩」（『藝文類聚』卷七十五）

② 華茵藉初卉 華茵 初卉に藉きて

芳樽散緒寒 芳樽 緒の寒を散す

南朝梁・劉孝綽「櫟口守風詩」（『詩紀』卷八十七）

鬱屈する思いを晴らすという意味の「散鬱結之緒」は、家持が作り出した用語と思われる。これと類似する漢詩文の表現を見てみよう。

① 辯論釋鬱結 辯論し鬱結を釋とき

援筆興文章 援筆し文章を興す

魏晉・應場「公燕詩」(『藝文類聚』卷三十九)

② 屢借山水、以化其鬱結。(屢しば山水を借り、以て其の鬱結を化せん。)

東晉・孫綽「三日蘭亭詩序」(『藝文類聚』卷四)

①の「釋鬱結」、②の「化其鬱結」は家持の「散鬱結」と同じ意味である。

「以散鬱結之緒耳」の「鬱結」の原因について、先行研究での解釈は様々で、それぞれが独自の見解を述べてきた。それらをまとめてみれば、以下のようになる。

- ① 生まれつきの憂鬱の人
- ② 生に対するアンニュイ
- ③ 妻坂上大嬢とは、恭仁と平城とに別れたまま
- ④ 遷都一年後、政局の不安定化により、作歌を楽しむことが制約された。
- ⑤ 風雅への想い、文芸意識の高まり、詩心の氾濫

弟書持の贈歌に答える三首の歌の題詞に用いられた「鬱結」には、色々な要因が考えられる。中でも当時、文芸上の友、即ち風雅を共に楽しむ友人がいなかったことが大きな要因として挙げられるかもしれない。初めて中国詩賦の形式で創作した「題詞」からも分かるように、家持は自身の創作に相当苦勞していたようである。六年後のものであるが、家持の池主への漢文書簡には、次のような内容が見られる。

但以_レ稚時不_レ涉_二遊芸之庭_一、橫翰之藻、自乏_二乎彫虫焉_一。幼年未_レ逕_二山柿之門_一、裁歌之趣、詞失_二乎聚林_一矣。

但し、稚き時に遊芸の庭に涉らざるを以て、横翰の藻は自ら彫虫に乏し。幼き年に未だ山柿の門に逕らず、裁歌の趣は詞を聚林に失ふ。

ここで述べられたのは、家持が池主に対し、自分は文才に恵まれず、漢詩文も和歌も上手くなく、歌を作る技巧にも乏しいという、自身の悩みであった。弟書持に与えた三首の歌を創作した時期にも、同様の悩みを抱えたのではなからうか。歌作りに相当な情熱を傾けていた二十四歳の家持は、当時、後の越中時代の池主のような「友」、つまり漢詩文だけではなく、和歌でも自分をリードしてくれるような「友」を求めていたのであろう。

家持は『詩経』小雅・「伐木」以来の文学的伝統に従い、「友」を求める喩えとして用いられる「嚶」により、ホトトギスの鳴き声を描いた。それは「友」、つまり自身の創作に対するよき理解者、指導者を渴望する思いによるものだったと言える。

「因作三首短歌、以散鬱結之緒耳」とは、三首の短歌を作ること「鬱結」する思いを晴らすという意味である。「家持の「鬱結」と中国文学（上）」で考察したように、著述や作詩により、「鬱結」する思いを晴らすといった用例は、漢籍に多く見られる。漢代の司馬遷がその「報任安卿書」で言及した周文王、孔子、屈原、左丘、孫臏、呂不韋、韓非らは皆、心に鬱結したものをもち、それを晴らすために発奮して著述をなした。司馬遷本人も古代の不遇な聖賢に倣い、大著『史記』を完成させた。その他に、西晋の代表的な詩人の潘岳の「獨り鬱結して其れ誰にか語ん、聊か思ひを斯の文に綴る」（「懷古賦」）、南朝梁の豫章王蕭綜の「氣鬱結し、涕滂沱たり／愁思託す所無く、強ひて作す、鐘を聴くの歌」（「聽鐘鳴」）はすべて、鬱結した思いを晴らすとして創作されたものである。家持はこのような先人たちの作品を通じ、歌を作ることが鬱結の心を晴らす術となることを知り、そして自ら実践したのであろう。

（二） 大伴池主に贈る「七言一首の詩序」における「鬱結」

家持は天平十八年（七四六）の七月末頃、越中に赴任した。その年の暮れに、病気に罹り、長い間病床に臥した。翌年の春、病気が快方に向かう中で、「忽沈_二枉疾_一、殆臨_二泉路_一。仍作_二歌詞_一、以申_二悲緒_一」一首并短歌を作る。重病で生死の境をさまよっていた時の心情

と、遠く離れた都の家族を懐かしむ思いが詠まれた。その他、同族であり、同僚でもある大伴池主へ、漢文書簡をつけて悲歌二首を贈った。これをきっかけに、家持と池主の贈答歌のやりとりが始まった。

三月四日、池主から詩序のついた七言律詩一首が贈られた家持は、その翌日、同じく詩序をつけた七言律詩一首を作り、短歌二首を附して返した。まず池主の七言詩一首の詩序であるが、以下の通りである。

七言、晚春三日遊覽一首并序

上巳名辰、暮春麗景、桃花昭_レ臉以分_レ紅、柳色含_レ苔而競_レ綠。于時也、携手曠_二望江河之畔_一、設_レ酒迺過_二野客之家_一。既而也、琴罇得_レ性、蘭契和_レ光。嗟乎、今日所恨、

德星已少歟。若不_二扣_レ寂含_レ章、何以據_二逍遙之趣_一。忽課_二短筆_一、聊勒_二四韻_一云尔。

上巳の名辰、暮春の麗景、桃花臉を昭らして紅を分かち、柳色苔を含みて緑を競ふ。

時に、手を携へて江河の畔を曠望し、酒を設けて迺に野客の家に過る。既にして

琴罇性を得て、蘭契に光を柔らぐ。嗟乎、今日恨むる所は、德星已に少くことなるか。

若し寂を扣き章を含まざれば、何を以てか逍遙の趣を據べむ。忽ちに短筆を課ひ、聊か

に四韻を勒すと云尔。

内容は、上巳の遊覽で楽しんだ晩春の美景、同僚との風雅な遊びを詠み、そして「德星」である家持の不在への遺憾の思いを綴る。この詩序は、『藝文類聚』卷三十一・人部十五「贈答」の項と『文選』卷二十四・「贈答」に所収される贈答詩を参考にして作られたと思われる。とりわけ晋の何劭の「贈張華」詩との類似点は顕著である。次に、両者の関連を考察していくことにする。

贈張華

張華に贈る

何敬祖

四時更代謝

四時は更々に代謝し

家持の「鬱結」と中国文学（下）

懸象迭卷舒

懸象は迭たがひに卷舒す

暮春忽復來

暮春は忽たちまち復た來たり

和風與節俱

和風は節とともと俱にす

俯臨清泉湧

俯して清泉の湧けるに臨み

仰觀嘉木敷

仰いで嘉木の敷けるを觀る

周旋我陋圃

我が陋圃ろうほを周旋し

西瞻廣武廬

西のかた廣武の廬を瞻みる

既貴不忘儉

既に貴たかくして儉を忘れず

處有能存無

有に處よて能く無を存す

鎮俗在簡約

俗を鎮しづむるは簡約に在り

樹塞焉足摹

樹塞することは焉いづくぞ摹るに足らん

在昔同班司

昔に在りては班司を同じくし

今者竝園墟

今は園墟ならを竝ぶ

私願偕黃髮

私ひそかに願ふ黃髮しよもを偕にし

逍遙綜琴書

逍遙して琴書を綜すべ

舉爵茂陰下

爵を茂陰の下に舉げ

攜手共躊躇

手を攜へて共に躊躇せんことを

奚用遺形骸

奚を用て形骸を遺れん

忘筌在得魚

筌を忘るるは魚を得るに在り

二十句より成るこの五言詩は三段に分けられ、第一段は第一句〜第六句、第二段は第七句〜第十二句、第三段は第十三句〜第二十句

高擧振六翻 高擧して六翻を振ふ

不念携手好 手を携へし好を念はず

棄我如遺迹 我を棄つること遺跡の如し

② 良人惟古權 良人古權を惟ひ

枉駕惠前綏 駕を枉げて前綏を恵む

願得常巧笑 願はくは常に巧笑を得んと

携手同車歸 手を携へ車を同じうして歸る

〔古詩十九首〕第七首・『文選』卷二十九

〔古詩十九首〕第十六首・『文選』卷二十九

①の「携手」は、男性同士の友愛、②は男女の情愛を指す。何劭の「携手」はいうまでもなく、①の男性同士の友愛、即ち、「交友」の意味として用いられる。『藝文類聚』卷二十五・人部五「交友」の項に「携手」によつて男性同士の友情を示す詩があつて、次の通りである。

東晉・郭璞「贈温匡嶠」

安得同攜手 安んにか共に手を攜へるを得

酌酒賦新詩 酒を酌みて新詩を賦す

南朝齊・謝朓「贈友人」

辰巳正明氏は、中国詩語における「携手」を考察して、家持が池主との「手携はり」(17・四〇〇六)も「交友」を示した用語であると指摘しているが、その通りであると思われる。ちなみに家持の四〇〇六番の歌は『大伴家持大事典』¹²⁾によれば、天平十九年四月三十日に作られたもので、池主の「七言、晚春三日遊覧一首の詩序」より後の作品である。つまり万葉歌人において、友情を示す「携手」の使用は、池主から始まったと言える。

何劭の「贈張華詩」と池主の「七言、晚春三日遊覧一首の詩序」は、語句の用法が似ている他、両作品の冒頭はともに暮春の景物に触発された心情を述べる。これは、中国の文学理論書の『文心雕龍』の「物色」篇の冒頭部にある「春秋は代序し、陰陽は慘舒す。物

色の動くや、心も亦揺く」(『文心雕龍』「物色」) という一文を連想させる。

また、両者にはもう一つ共通する点がある。何劭の「在昔同班司」(『贈張華』)によれば、詩人は張華と同じ役所に仕えていた。この点においても、池主と家持の関係に似ている。池主は三等の掾、家持は国司であり、二人は共に越中国で任務に就いていたのである。家持に贈る「七言、晚春三日遊覽一首の詩序」を構想する時に、池主は何劭の「贈張華」の詩を念頭に置いていたと思われる。何劭の「贈張華」詩を踏まえた上で、象徴的な意味を持つ「携手」の詩語を取り入れるなど、自身の「交友」の気持ちを家持に伝えようとしている。それでは、家持は、池主のこういつた気持ちを知したのであろうか。次に、家持の七言一首の詩とその詩序を見てみよう。

昨暮来使、幸也以垂_レ晚春遊覽之詩、今朝累信、辱也以睨_二相招望野之歌。一看_二玉藻、稍写_二鬱結、二吟_二秀句、已_レ觸_二愁緒。非_二此眺翫、孰能暢_レ心乎。但惟下僕、稟性難_レ彫、闇神靡_レ瑩。握_二翰腐_レ毫、对_二研忘_レ渴。終日目流、綴_レ之不能。所謂文章天骨、習之不_レ得也。豈堪三探_レ字勒_レ韻、叶_二和雅篇_レ哉。仰聞_二鄙里小兒_レ、古人言無_レ不_レ酬。聊裁_二拙詠_レ、敬擬_二解吟_レ焉。如今賦_レ言勒_レ韻、

同斯雅作之篇、豈殊_二蔣_レ石問_レ瓊。唱声遊走曲歟、抑小兒嘗_レ濫誦。敬写_二葉端_レ、式擬_レ乱口、
昨暮の来使は幸にして以て晚春遊覽の詩を垂れ、今朝の累信は辱くも以て相招望野の歌を睨ふ。一たび玉藻を見れば、稍鬱結を写し、二たび秀句を吟ずれば、已に愁緒を觸く。この眺翫に非ざれば、孰か能く心を暢べむや。但しこれ下僕稟性彫り難く、闇神瑩くことなし。翰を握りて毫を腐し、研に對ひて渴くことを忘る。終日目流して、これを綴る能はず。所謂文章は天骨にして、これを習ふこと得ずといふ。豈字を探り韻を勒して雅篇に叶和するに堪へめや。仰鄙里の小兒に聞くならく、「古人は言ひて酬いざるることなし」ときく。聊かに拙詠を裁りて、敬みて解吟に擬ふ。如今言を賦し韻を勒し、この雅作の篇に同するは、豈石を將て瓊に問ふるに殊ならめや。唱声の遊走せる曲なるか、抑小兒すら濫誦に譬へむか。敬みて葉端に写し、式で乱に擬へて曰く、

杪春余日媚景麗 初巳和風扨自輕

来燕銜_レ泥賀_レ字入 婦鴻引_レ蘆迺赴_レ瀛
聞君嘯_レ侶新_二流曲_レ 禊飲催_レ爵泛_二河清_レ

家持の「鬱結」と中国文学(下)

家持の「七言一首の詩序」に用いられる「眺翫」「目流」は、漢籍に用例を見出せないが、張華の「流目翫鱸魚」（「答何劭」詩）を基にして作り出した言葉かと思われる。池主から贈られた「七言、晚春三日遊覧の詩序」が何劭の「贈張華」詩を参考にして作ったことを知っている家持だからこそ、敢えて張華の「答何劭」詩の詩句を借り、或いは置き換えるなどして、池主と中国文人を真似た風雅な贈答を楽しもうとしたのである。では家持の詩序が張華の「答何劭」詩とどのように関連するのか、以下で具体的に検討していくことにする。

張華の「答何劭」詩は、『藝文類聚』卷三十一・人部十五「贈答」の項と『文選』卷二十四・「贈答二」に収められるが、詩の前六句が『藝文類聚』には収録されていない。本稿は『文選』卷二十四・「贈答二」所収の何劭の「贈張華」詩に従う。

答何劭

答何劭に答ふ

吏道何其迫

吏道は何ぞ其れ迫れる

窘然坐自拘

窘然として坐るに自ら拘はる

纓綉爲徽纒

纓綉は徽纒と爲る

文憲焉可踰

文憲は焉んぞ踰ゆ可けん

怡曠苦不足

怡曠は苦だ足らずして

煩促每有餘

煩促は毎に餘有り

良朋貽新詩

良朋は新詩を貽り

示我以遊娛

我に示すに遊娛を以てす

穆如灑清風

穆として清風の灑ぐが如く

奥若春華敷

奥として春華の敷けるが若し

自昔同寮采

昔寮采を同じうしてより

於今比園廬

今に於いては園廬を比ぶ

衰夕近辱始

衰夕は辱始に近し

庶幾竝懸輿

庶幾はくは竝ぶに輿を懸けん

散髮重陰下

髮を重陰の下に散じ

抱杖臨清渠

杖を抱いて清渠に臨み

屬耳聽鶯鳴

耳を屬けて鶯鳴を聽き

流目翫儵魚

目を流して儵魚を翫び

從容養餘日

從容として餘日を養ひ

取樂於桑榆

樂みを桑榆に取らん

張華のこの詩も何劭の「贈張華」詩と同じく、その構成は三段に分けられる。第一段は第一句〜第六句、第二段は第七句〜第十二句、第三段は第十三句〜第二十句である。第一段は何劭に誘われた晩年の話、つまり、官を辞した後の夢の話を踏まえ、今までの官吏の仕事の窮屈さ、つらさを述べる。第二段は、何劭の「清泉涌」「嘉木敷」の詩句を踏まえ、君の詩は「穆として清風の灑ぐが如く、輿として春華の敷けるが若し」であると、「良朋」の新詩への賛美、そして共に遊ぼうという誘いに対する感動を詠む。第三段では年を取った自分も官を辞し、「良朋」と共に田園生活を自由自在に楽しみたいという心情が述べられる。

張華は、何劭の「私かに願ふ黄髮を偕に逍遙して琴書を綜べ／爵を茂陰の下に擧げ、手を攜へて共に躊躇せんことを」の誘いに対して、「髮を重陰の下に散じすべき、杖を抱いて清渠に臨み／耳を屬けて鶯鳴を聽き、目を流して儵魚を翫び」と答える。そして何劭の友情を示す「携手」に対して、張華は友を求め合うことを象徴する「鶯鳴」で応じる。この贈答詩でのやりとりから、何劭と張華は共に、優れた文才の持ち主であったことがよく分かる。

張華も何劭も博学で且つ詩作に優れた。特に張華は賦だけでなく、五言詩も善くし、兒女の情を表すことに長じた。二人とも晋の重

要な官職に就いたが、人望も文才も張華は何劭より上であつた。何劭は父親譲りの性格で、かなり贅沢な生活を送っていたといわれる。そういう彼だからこそ、自分と正反対の張華に心惹かれたのである。何劭は「贈張華」詩において、「既に貴くして儉を忘れず、有に處て能く無を存す／俗を鎮むるは簡約に在り、樹塞することは焉んぞ擧るに足らん」と詠んで張華の美德を褒めて、人格者である張華を心から尊敬する気持ちを伝えている。

張華の「答何劭」詩と家持の七言詩一首の詩序とを比較すれば、両作品の用語には、以下のような類似点が見られる。

- | | | | |
|---|-----------------|---|---------------------------------|
| A | 張華の「答何劭」詩 | B | 家持の七言律詩の詩序 |
| ① | 良友貽新詩 | | 幸也以垂晚春遊覽之詩 |
| ② | 示我以遊娛 | | 晚春遊覽、相招望野 |
| ③ | 穆如灑清風、
粲若春華敷 | | 一看玉藻、
稍写鬱結、
二吟秀句、
已蠲愁緒 |
| ④ | 翫儵魚 | | 非此眺翫、
孰能暢心乎。 |
| ⑤ | 流目翫儵魚 | | 終日目流 |

③の「穆如灑清風、粲若春華敷」は、清らかな風が吹くようになごやかな気が満ち、春の花が咲き匂うように光り輝いているという詩意である。君の詩を読むことよって、窮屈な仕事による不快感が一気に晴らされたと、張華は何劭に伝えている。この二句は、何劭の詩に対する高い評価であり、その詩を読んだ張華の心情の表象でもある。家持の「一看玉藻、稍写鬱結、二吟秀句、已蠲愁緒。非此眺翫、孰能暢心乎」も先行研究が指摘するように、池主の「晚春遊覽の詩」と「相招望野の歌」に対する家持の感想である。

両作品は用語と表現が異なるものの、内在された意味は同じである。共に詩歌が持つ働きに対する認識を表しているのである。

家持の「稍写鬱結」の「鬱結」には様々な要因が考えられる。例えば、家族を都に置いて一人で越中に赴任したこと、弟と別れて二か月後に、二十代の若さで弟書持が亡くなったこと、家持本人も重病に罹り、長く病床に伏したこと、また、三月三日に同僚たちとの雅な遊びができなかったことで心が晴れ晴れとしない、などである。しかし、先行研究でも指摘されたように、家持の「鬱結」はやは

り、「詩心の氾濫」によるものであったと思われる。

家持の詩序の「但惟下僕、稟性難彫、闇神靡登。握翰腐毫、对研忘渴。終日目流、綴之不能。所謂文章天骨、習之不得也。豈堪探字勒韻、叶和雅篇哉。」の部分は、自分は作歌が好きで、努力もしたが、持って生まれた資質の為にどうにもならないという、家持の抱えた悩みが切々と表されている。

家持の「非此眺翫」の「眺翫」は、張華の「答何劭」詩の第十八句の「流目翫儵魚」の「翫」を取り入れて、四字句の形式に合わせる為に「翫」の前に「眺」をつけ、作り出したものであろう。張華の「流目翫儵魚」とは、泳いでいる小さい魚を目で追いかけて、眺めるという詩意で、その「流目」は、ある方向に目を向けて眺めるという意味である。家持の「目流」であるが、これも漢籍に見えない語で新日本古典文学大系『萬葉集』(四)の解釈によれば、あちこちを眺めること。「流目」の語順が正しいであろうという。家持は張華の「流目」を自分なり「目流」にしたのであろう。

ちなみに「孰能暢心乎」の「暢心」は、弟書持の贈歌に報える歌の題詞における「暢志」と同じ意味であると思われる。

「暢心」について『漢語大詞典』¹⁴の解釈は次の通りである。

(1) 充分表达心意。晋 欧阳建《言尽意论》：「言不暢心，则无以相接。」

(2) 心情愉快。《红楼梦》第九十回：「真乃是从古至今，天上人间，第一件暢心满意的事了。」

『漢語大詞典』の「暢心」の(1)は、気持ちをも十分に表すという意味である。晋の歐陽建の『言盡意論』に「気持ちを十分に表せない言葉に答えることができない」とある。「暢心」の(2)は、気持ちが愉快であることを表すという意味である。『红楼梦』第九十回に「これはほんとうに昔から今まで、なかったことであり、天上の仙人の世界にも、人間の世界にも、これほど心を伸びやかにして、うれしく満足するのは初めてである」という意味である。

「暢心」は唐代から用いられるようになった語である。それ以前では「暢心神」が一例あり、魏晋の王肅之「蘭亭詩二首」其二に見られる。

嘉会欣時游 嘉会に時游を欣び

家持の「鬱結」と中国文学(下)

王肅之の「暢心神」を参考に、家持は歌語「暢心」を作り出したかもしれない。

以上の考察により、家持の「七言一首詩の詩序」が張華の「答何劭」の詩を踏まえたことは明らかと言える。ところで詩の方であるが、張華の「答何劭」詩ではなく、何劭の「贈張華」詩が、作詞の上で念頭にあったと考えられる。

家持の「七言一首」詩の第一句・二句の「杪春余日媚景麗、初巳和風私自輕」は、一見すれば池主の詩序の冒頭の「上巳名辰、暮春麗景」を踏まえているようである。「贈張華」詩の第三句・四句の「暮春忽復來、和風與節俱」と対照してみれば、何劭の「和風」をそのまま取り入れ、「暮春」の代わりに同じ意味を表す「杪春」を用いていることが分かる。また家持の第七句の「雖欲追尋良此宴」の「良」は「贈張華」詩の第七句の「良朋貽新詩」の「良」を意識して用いた言葉ではなからうか。

池主と家持の贈答詩、そしてその詩序は、『藝文類聚』卷三十一・「贈答」の項と『文選』卷二十四・「贈答」に所収される中国文人の贈答詩を真似て作られたものである。三月三日の上巳芳辰の水辺での遊覧、琴を弾いたり、詩を吟じたり、酒を飲んだりなど、中国文人の風雅な遊びまで真似ている。これは海の向こうの文人雅士の生き方への、万葉歌人の憧憬を表している。

(三) 久米広繩に贈る悲別の歌の題詞における「鬱結」

久米広繩について、『大伴家持大事典』¹⁵によれば、伝記は未詳で、天平二十年（七四八）の三月頃、越中国掾大伴池主が越前掾に転じた後、その後任となった人物だという。万葉集中に久米広繩の歌は決して多くはないものの、その中で家持との贈答歌が目立つ。伊藤博氏はその四〇五〇番の歌の『釈注』¹⁶で、久米広繩のその人物像、及び家持との関係について、

すこぶる生真面目な人柄であつたらしく、池主とはまた違った形で家持の大きな信頼を受けていた。と指摘している。

天平勝宝三年（七五一）の七月、家持は少納言に遷任された。帰郷する前に家持は、上京中だった久米広繩のその館へ、「悲別の歌」を預けて届けた。

以^二七月十七日、遷^二任少納言。仍作^二悲別之歌、贈^二貽朝集使掾久米朝臣広繩之館^二二首既滿^二六載之期、忽值^二遷替之運。於是別^レ旧之悽、心中鬱結。拭^レ涕之袖、何以能早。

因作^二悲歌二首、式遺^二莫忘之志。其詞曰、

七月十七日を以て少納言に遷任しき。仍ち悲別の歌を作りて、朝集使掾久米朝臣広繩の館に贈り貽しし二首

既に六載の期に満ち、忽ちに遷替の運に値ふ。ここに旧を別るる悽しみ、心中に鬱結す。涕を拭ふ袖、何を以てか能く早さむ。因りて悲歌二首を作り、式で莫忘の志を遺す。その詞に曰く、

あらたまの年の緒長く相見てしその心引き忘れえぬやも

石瀬野に秋萩しのぎ馬並めて初鳥狩だにせずや別れむ

(19・四二四八)

(19・四二四九)

題詞に使われた「悲別」「悲歌」「拭涕」「別旧之悽」及び「心中鬱結」は、いずれも離別の悲哀と関わりを持つ用語である。家持はこの「悲別の歌」を創作する為に、漢詩の詩語、詩句をそのまま取り入れたり、或いは参考にした上で新しい歌語を作り出している。そればかりではなく、表現上にも工夫を凝らした。

「悲別之歌」の「悲別」であるが、家持は名詞として用いられていたが、このような用法は漢詩文にはない。

① 願観卒歡好 願はくば卒に歡好を觀

不見悲別離 別離を悲しむを見ざることを 魏晉・阮藉「詠懷詩十七首」其九(『文選』卷十)

② 樂哉新相知 樂しいかな 新相知

悲矣生別離 悲しいかな 生別離 南朝齊・吳邁遠「擬樂府四首」(一)飛來雙白鶴(『玉台新詠』卷一)

③ 銜悲別隴頭 悲しみを銜えて隴頭に別る

關路漫悠悠 關路 漫りに悠悠たり 南朝梁・蕭繹「隴頭水」(『藝文類聚』卷四十二)

①の「悲別離」、②の「悲矣生別離」、③の「銜悲別」を基にして、家持は歌語の「悲別」を作り出したと考えられる。また家持の「悲歌」も「悲別」と同様名詞として用いられている。

① 行觴奏悲歌 行觴し 悲歌を奏つ

南朝宋・謝靈運「擬魏太子鄴中集詩八首」其四 徐幹（『詩紀』）

永夜系白日 永夜 白日に系く

② 悲歌辭舊愛 悲しく歌ひて舊愛を辭し

銜淚覓新知 淚を銜みて新知を覓む

南朝宋・鮑照「詠双燕」（『玉台新詠』卷四）

①の「悲歌」は名詞で、家持の用法と同じある。②の「悲歌」は「形容詞＋動詞」という構造の詩語であり、よく用いられる。

「拭涕」の「涕」であるが、小島憲之氏が『上代日本文學と中國文學・中』¹⁷⁾で考証されたように、「涕」は「涙」の意味で用いられる。漢詩に「拭淚」の用例が少なくはなく、男性が女性の身になって吟じる「離別詩」、「閨怨詩」によく見られる。

① 客行祗念路 客行 祗だ路を念ふ

相將渡江口 相將いて江口を渡る

誰知堤上人 誰か知らん堤上の人

南朝梁・蕭綱「春江曲」（『玉台新詠』卷十）

拭淚空揺手 淚を拭ひて空しく手を揺かす

② 藏啼留送別 藏れて啼きて送別を留む

拭淚強相參 淚を拭ひて強いて相參す

北周・庾信「贈別詩」（『庾開府詩集上』）

「別旧之悽」は漢籍に用例を見出せなく、家持が「離別」を主題とする漢詩を参考にして作り出した用語と思われる。『漢語大詞典』¹⁸⁾によれば、「旧」は「旧交（古くからの友人）」を指す。『藝文類聚』卷二十九・「別上」の項に収められる謝靈運の「鄰里相送方山詩」

という「送別」の詩に、

解纜及流潮　　纜ともしづなを解きて流潮に及ばんとするも

懷舊不能發　　舊を懷たひて發する能はず

とある。ここの「懷舊」は旧友を懐うという意味である。また「別旧之悽」の「悽」は、『漢語大詞典』で、「悲痛（いたむ、かなしむ）」と説明される。離別による「悽しみ」は初唐の虞世南の「裁執斷曲を悽しみ、織素別離の心」（怨歌行）に見られる。「心中鬱結」も漢籍に用例を見出せないものの、類似語の「心鬱結」「心中結」「氣結」は以下のように用いられている。

『藝文類聚』卷三十・「別下」の項に収められる曹丕の「出婦賦」に

情悵悵而顧望　　情悵悵して顧望し

心鬱結其不平　　心鬱結して其れ平らかならず

とある。二十年も一緒に暮らした夫に捨てられ、家を出された女性の悲しみ、怨み、不満不平が「心鬱結」によって表されている。その他、『玉台新詠』卷九に収められる南朝梁の張率の「長相思二首」其二に

長相思　　長く相思ふ

久離別　　久しく離別す

美人之遠如雨絶　　美人の遠き雨の絶えたるが如し

獨延佇　　獨り延佇す

家持の「鬱結」と中国文学（下）

心中結

心中結ぶ

とある。夫婦が長く離居して、心が鬱々として結ばれることを「心中結」で表現している。

親しい人との離別による「鬱結」の用例は、建安七子の一人である徐幹の「室思一首」詩にも見られる。六章からなるこの詩の「二章」に、

峨峨高山首

峨峨たり高山の首

悠悠萬里道

悠悠たち萬里の道

君去日已遠

君去つて日に已に遠し

鬱結令人老

鬱結 令人をして老いしむ

〔玉台新詠〕卷一

とある。夫は行商、従軍に出たまま帰ってこない。夫と長く離別した妻の鬱々とした心を「鬱結」という語で表す。また友人と別れて、気が晴れ晴れとしないことを表す用例もある。

悲與親友別

悲しむ 親友と別るるを

氣結不能言

氣結びて 言ふ能はず

〔古詩八首〕其七〔藝文類聚〕卷九十

以上の用例は、いずれも万葉歌人に愛読された『藝文類聚』と『玉台新詠』に所収される。曹丕の「心鬱結」、張率の「心中結」、徐幹の「鬱結」及び「古詩八首」其七の「氣結」を下敷きにし、家持が「心中鬱結」を作り出したと考えられる。「心中鬱結」は曹丕の「心鬱結」と同じ意味である。「悲別の歌」の題詞は中国詩賦の形式に基づく四字句と六字句で綴られたもので、字数を揃える為に、家持は「心中鬱結」にしたものと思われる。

「悲別の歌」の第一首では、久米広縄の人柄を称賛し、その友情を忘れない気持ちで詠まれた。第二首は、以前のように鷹狩を共に楽しむことができなくなったこと、親友との別れを惜しむ気持ちを述べる。

「別旧之悽」を主題とするこの歌と題詞は、曹植の「離友詩」と類似するところがある。曹植には「離友詩三首」という詩題が残っているが、詩は二首しか現存しない。詩はその内容により、「離友詩三首」其の一と其の二がそれぞれ『藝文類聚』交友の項と『藝文類聚』別上の項に収められる。交友の項に所収される「其の一」には次のような序文が付されている。

郷人有_二夏侯威者_一、少有_二成人之風_一。余尚_二其爲_レ人_一、與之昵好。王師振旅、送_レ余於魏邦、心有_二眷然_一、爲之隕_レ涕。乃_二作離友之詩_一、其辭曰：

郷人に夏侯威なる者有り。少に有る成人の風なり。余其の人と爲りを尚びて、之と昵好たり。王師振旅し、余を魏邦に送るに、心に眷然たる有り。之が爲に涕を隕す。乃ち友に離るるの詩を作る。その辭に曰く：

この詩序で曹植は里人の夏侯威と親しく付き合い始めた経緯、「離友詩三首」を創作した理由を記す。『先秦兩漢魏晉南北朝詩歌鑑賞辭典』¹⁹⁾によれば、建安十七年（二一三）の冬、曹植は父親の曹操の大軍に従い、孫権征伐に赴いた。翌年の春、曹操軍は凱旋して魏の都の鄴に戻ったのだが、その途上で、故郷の譙を通過した際に、しばらくそこに滞在した。曹植はこの時に同郷の夏侯威と親しくなり、意気投合した二人は親友となった。

夏四月、夏侯威は曹植を魏の都まで送って行く。そして秋まで都に滞在し、その後故郷へと帰っていった。曹植は「離友詩」の序文で夏侯威を「少有成人之風（稀にしかない德才兼備な持ち主）」と褒めて、自分が彼と仲良くなったのは「余尚其爲人（私は彼の人柄に心惹かれた）」からだと言う。詩序の結末では、夏侯威と別れるのが名残惜しくて涙が流して、そこで、「離友詩」を作ったと述べている。

「離友詩三首」の其の一は、夏侯威が曹植を鄴まで送っていった経緯、二人が旅の途中で分かち合った喜び、鄴で曹植が心を込めてこの親友をもてなしたことを描く。詩の第二句の「彼君子兮篤人綱」は、夏侯威の人となりが温厚であることを讃えている。

「離友詩三首」其の二は、故郷に帰る夏侯威を見送った時のことを記し、親友と別れる詩人の悲しい心情を描く。結句では、「鬱結」の意味に近い「鬱悒」の語が用いられている。ここで「離友詩三首」の其の二を見てみよう。

離友詩三首其二 友に離るるの詩其の二

涼風肅兮白露滋 涼風肅として白露しづ滋く

木感氣兮條葉辭 木は氣に感じて條葉じ辭す

臨淥水兮登重基 淥水に臨み重基に登る

折秋華兮采靈芝 秋華を折り靈芝を采る

尋永歸兮贈所思 永歸を尋ねて 思ふ所に贈らん

感離隔兮會無期 離隔に感ずるも會ふに期無し

伊鬱悒兮情不怡 伊こに鬱悒して情な怡しませず

詩意は、涼風が蕭々と吹き、白露が草にたつぷりと溜まっている。樹木は秋の気を感じて、その葉を散らす。淥水の水辺に立ち、高い丘に登って遠くを眺めた。秋の花を摘んで靈芝を採り、まもなく故郷に帰ろうとする親友に、私はこれら贈ろうと思う。ここで別れたが、最後、もう二度と会えないのかと思うと、私の心はふさがり、とても楽しむことなどできない、と。

この詩は宋玉の「九辯」と関連があると指摘されている。確かに第一句・二句・三句及び第五句の半分は、宋玉の「九辯」の冒頭の部分の「悲しいかな、秋の氣たるや。蕭瑟たり、草木搖落して、變衰す。慄慄たり、遠行に在りて、山に登り水に臨み、將に歸らんとするを送るが若し」を参照し構想したものと思われる。宋玉の表現を借りて描かれた秋のもの寂しい景色に、友人との別れを悲しむ曹植の心情が表現されている。

第四句・五句は、屈原の「芳馨を折りて思ふ所に遺らんとす」（「山鬼」）を下敷きにされている。「山鬼」詩の中では、山の女神が薰り高い花を摘み、恋慕う人間の男性に贈ろうとする。草花を摘んで、人に贈るという行為は、愛情を示す文学表現の一つであって、

その伝統は『詩経』に遡る。山の女神の花は愛の印である。一方、曹植は友情の印であった。曹植は故郷に帰ろうとする友人に花と靈芝を贈った。靈芝は仙草で、人を不老長寿にする不思議な力を持つとされ、大事な人に捧げる最高の贈り物である。曹植は花と靈芝に託し、親友に対する真摯な感情を詠んだが、屈原の「山鬼」詩の発想と表現が活かされていたと言える。

第六句は、屈原の「悲しきは生別離より悲しきは無し」（「少司命」）、第七句は、「心怡しまざること此れ長久なり。憂と愁と其れ相接す」（「九章」哀郢）を踏まえていることが明らかである。特に第七句の「鬱悒」は、屈原の「離騷」と「九章」・惜誦の「鬱悒」の用法と同様である。両者の相違は、屈原の「鬱悒」が身の不遇に苦しんでいることによるものであるのに対して、曹植のそれは親友と離別してもう会えないのだろうという悲哀の情によるものである。

曹植の「離友詩」の特徴は、友人との仲を恋人同士のように表現するところにある。六朝時代に、友情詩は恋愛詩より多く、男性同士は友情詩を恋愛詩のように書くのが当時の風潮である。曹植の「離友詩」にもこうした時代傾向が垣間見られる。

曹植の「離友詩」については家持はとづくに知っている。十七歳の時、創作した相聞歌の六一一番の歌に曹植の「離友詩」其の二の影響が見られる。

今更 妹尔将相八跡 念可聞 幾許吾胸 鬱悒将_{いふせく}有

今更に妹に逢はめやと思へかもここだく我が胸いふせくあるらむ

（4・六一）

歌の前半の「今更に妹に逢はめやと思へかも」は、曹植の「離隔に感ずるも會ふに期無し」を翻案したものである。また歌の後半の原文「幾許吾胸 鬱悒将_{いふせく}有」を曹植の詩の原文「伊鬱悒兮情不怡」と比較してみれば、家持の歌が曹植の詩を真似たことが明らかである。すなわち家持の六一一歌の発想、モチーフ及び表現は「離友詩」其の二の第六句、七句の「離隔に感ずるも會ふに期無し、伊に鬱悒して情怡まず」に由来することは疑いがないものと思われる。

『大伴家持大事典』²¹によれば、六一一歌は、天平七年（七三五）に作られた一方、久米広繩に贈る「悲別の歌」は、天平勝宝三年（七五一）、家持が三十四歳の時に作ったのである。二首の歌は制作時期にかなりの隔りがあるが、離別による悲哀を主題とするところ

が同じである。

家持の「悲別の歌」の題詞を曹植の「離友詩」、及びその詩序とを比較すれば、以下のことが明らかである。

A 曹植の「離友詩」の詩序と「離友詩」其二 B 家持の「悲別の歌」の題詞

① 乃作「離友之歌」（「離友詩」の詩序） 仍作「悲別之歌」

② 離友 別旧

③ 「離友詩」伊鬱悒兮情不怡 別旧之悽

① 鬱悒 鬱結

② 隕涕 拭涕

③ 其辭曰： 其詞曰、

②の「別旧」は、曹植の詩題の「離友」を翻案したものである。③の「別旧之悽」は、「離友詩」其二の第六句・七句の「離隔に感ずるも會ふに期無し、伊に鬱悒して情怡しまず」を元にして作り出したもので、創意に富んだ表現と言える。他の部分の用語、表現も曹植のそれと似通っている。その他、「題詞」ばかりではなく、家持の「悲別の詩」の第一首の歌も曹植の「離友詩三首」の詩序との関わりを見出すことが出来る。

曹植の「離友詩三首」の詩序に、「余尚其爲人」がある。「爲人」とは人柄という意味である。家持の「悲別の歌」の第一首の歌の「その心引」は、「あなたの心にひかれて」と解釈されている。この「その心引」は、曹植の「余尚其爲人」と同じことを表す。曹植は夏侯威の人柄に引かれて仲良くなったのである。一方、家持が久米広繩と長きにわたって親しく付き合ったのも久米の「その心引」によったのではなからうか。家持は曹植の「余尚其爲人、與之昵好。」を踏まえ、「悲別の歌」の第一首を構想したと思われる。特に友人との別れの為に、晴れ晴れとしない気持ちを表す「心中鬱結」は、曹植の「鬱悒」からヒントを得たのであろう。

おわりに

以上、「鬱結」という語が用いられた家持の三作品について、その用語や表現法を詳細に検討し、且つ家持が手本としたであろう漢詩文の関連を考察して、家持の「鬱結」は漢詩文との深い関わりを明らかにした。

家持のこれら三作品の主題は、「友」で三つの作品を繋げることができると思われる。(一) 弟書持の贈答に報える歌の「題詞」の主題は「友を求めぬ」、(二) 大伴池主に贈る「七言一首の詩序」の主題は「交友」、(三) 久米広繩に贈る悲別の歌の「題詞」の主題は「離友」によって統べ括れる。漢詩文より取り入れた「鬱結」によって家持は自分の心情をそれぞれよく表したと言えよう。

弟書持の贈答に報える歌の「題詞」における「鬱結」は、家持自身の創作に対するよき理解者、指導者を渴望する思いによるものである。大伴池主に贈る「七言一首の詩序」での「鬱結」は、「詩心の高揚」である自分、即ち文学創作を好むものの、資質上の問題、及び幼少期における努力不足といった悩みを抱えた自身の現状による。久米広繩に贈る悲別の歌の「題詞」における「鬱結」は、親友との離別で悲しむ思いによった。

家持は「鬱結」する心を晴らす為に二つのよい方法があることを知っていた。まず一つは、古代中国の聖賢から教わったもので、文学創作に取り組むことである。もう一つは、優れた文学作品の鑑賞である。これも晋の詩人の張華の「答何劭」詩から学んだものではなからうか。

注

- (1) 小野寛『大伴家持研究』笠間書店 昭和五十五年三月三十一日
- (2) 橋本達雄『古代伝承論』大伴家持と二十四節氣 桜楓社 昭和六十二年
- (3) 『萬葉集』(四) 新日本古典文学大系 岩波書店 二〇〇三年一月三〇日
- (4) 『日本うたことば表現辞典』③動物編 日本うたことば表現辞典刊行会 遊子館 一九九八年一月十六日

- (5) 山口仲美『ちんちんと千鳥のなく声は』大修館書店 一九八九年四月二〇日
- (6) 森野繁夫『謝靈運論集』白帝社 二〇〇七年十二月十日
- (7) 謝靈運の四友とは、謝靈運が永嘉郡から始寧に帰った時期に付き合った何長瑜、荀雍、羊璿之と謝惠連を指す。(森野繁夫『謝康樂詩集』卷上 白帝社 平成五年九月二十四日より)
- (8) 五臣注本は「嘤鳴」に作る。内田泉之助『文選』(詩編)上 新訳漢文大系 明治書院 平成十七年五月二十日
- (9) 漢語大詞典編輯委員会漢語大詞典編纂処『漢語大詞典』二〇〇一年九月
- (10) 周贛天主編『詩經楚辭鑒賞辭典』商務印書館 国际有限公司 二〇一二年一月
- (11) 辰巳正明『万葉集と比較詩学』おうふう一九九七年
- (12) 小野寛(編著)『天伴家持大事典』笠間書店 二〇一〇年十一月十五日
- (13) 伊藤博『万葉集の表現と方法』下 塙書房 昭和五十一年十月三十日
- (14) (9)と同じ。
- (15) (12)と同じ。
- (16) 伊藤博『万葉集积注』集英社
- (17) 小島憲之『上代日本文學と中國文學』中 塙書房 昭和六十三年十月三十日
- (18) (9)と同じ。
- (19) 魏耕原等主編『先秦兩漢魏晉南北朝詩歌鑒賞辭典』商務印書館 二〇一二年一月
- (20) 同上。
- (21) (12)と同じ。
- (22) 中西進『中西進著作集』30 大伴家持 三 四季社 平成二十二年十一月三十日